

## 中国河北農村における家神 ——石家荘市趙県を事例として——

滝川 麻子\*

### はじめに

中国河北省石家荘市趙県の農村では、家の中に様々な神が祭られている。家の中央の部屋には多くの神々が描かれた神画が掛けられ、日々線香が供えられており、家の各所にも灶神、財神、土地神、南海老母、倉官、地母といった神が祭られている。

中国では改革開放政策が始まった1980年代以降、それまで文化大革命の影響で行われなくなっていた伝統的な行事、習慣が再びみられるようになり、「民俗の復興」とも言われている<sup>①</sup>。趙県の村々でも村の神を祭る廟が再建され、伝統的な行事が復活してきており、趙県における家の神もこうした流れによるものである。

本稿では、現地調査による資料に基づき、趙県における家の神に対する信仰について、祭られている神々の性格、祭祀などそのあり方について記述、検討し、これらの神が祭られていることの背景について考察していきたい。家は人の生活の基本単位となる場であり、家の中に祭られる神は、最も身近な、生活に密接に関わる神であると言える。したがってその信仰のあり方を理解することは、中国の人々の生活や信仰を理解する上で重要であると思われる。

本稿においてはこれら家の敷地内に祭られている神々を、「家神」と総称しておくことにした。調査地において家に祭られている神々を指す場合は「灶王」「土地」といった個々の神の名を単独で呼ぶことが一般的であり、時に「家宅六神」などと呼ぶこともある。けれども「家宅六神」といっても実際には必ずしも六つの神が祭られているとは限らないこともあり、本稿では家の神々の総称として中国における民俗学関係の著作で使われている家神という語を用いておく<sup>②</sup>。

中国においては古来より、各王朝によって祭祀制度が制定されてきた。家における神祭祀の歴史は古く、周末から秦、漢の礼書『礼記』には宮中小神として「戸・竈・中霤・門・行」という五祀の記載があり、竈神、門神などの家の神が民間でも古くから祭られてきた（池田1981：807）。家に祭られる神やその祭祀には、時代とともに変化がみられるが、例えば宋代『東京夢華録』には、十二月二十四日に竈の神の像を竈に貼り、酒粕を竈の口に塗って祭ったという記録がみえる（孟元老1996：345）。

明清期においては、各戸で竈神や祖先の祭祀を行うべきことが定められていた（濱島2001：118）（小田1994：9-10）。清代光緒年間の『燕京歲時記』には当時の北京において家宅に竈神、門神、天地神、財神といった神が祭られたことが記されている（敦崇1967：3-8）。また中国全土に

---

※神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科前期課程

において、特に明代から清、民国期にかけて盛んに編纂された各地方志には、風俗の項にその地の年中行事や習慣について記載されており、そこから全国にわたり家に神を祭る習慣が存在したことを知ることができる。

中国の家の神についての先行研究は主に、灶神（竈神）や土地神など個別の神についての文献による道教研究や<sup>9)</sup>、戦前からの華北及び戦後の主に台湾、香港、東南アジア地域などにおける漢族の民俗宗教・民間信仰に関する調査研究の成果の一部として蓄積されてきた<sup>10)</sup>。

近年の中国における現地調査に基づいた研究のうち、家神に関わるものとしては、金丸良子（1987）、浅川滋男（1994）、周虹（1996）、聶莉莉（1997）、三山陵（1997）、田村廣子（1999）などがある。また福田アジオを中心とした調査団により中国江南地方において継続的に行われている民俗調査報告（1992、1995、1999、2001）や、華北農村の調査報告である三谷孝編（1999）、三谷孝ほか（2000）においても、竈神等について報告されている。

総じて、中国の家神に関する先行研究には、現代中国における現地調査に基づき専門に家神のことを論じた研究は少なく、その本格的な研究、分析はこれからであると言える。

本稿は筆者が2001年2月、4月、7月及び2002年3月から4月にかけて計約一ヶ月行った現地調査に基づいている。本稿の構成としては、まず第一章で調査地の概況について述べ、第二章で調査地において家に祭られている神々についてその由来や性格を聞き書き資料と文献資料に基づき記述、検討し、第三章でそれらの神々を祭る際の祭祀について述べる。そして第四章で人々の神々に対する見方について述べ、第五章では、この地域において家神が祭られていることの背景やそのあり方について考察を行っていきたい。

## 一 調査地の概況

本稿の調査地河北省趙県は華北平原の中南部、河北省の南部に位置し、行政上は河北省の省都石家荘市に属す。石家荘市からは東南約40kmの距離にある。なお中国の行政区分は省―市―県―郷（鎮）―村となっている。

趙県は面積約675平方km、11の郷（鎮）と281の行政村があり、人口約53万人である（李豊貴主編1999：6）。筆者が調査を行ったのは、趙県東部の行政上疙瘩頭郷に属する常信二村で、趙県県城からは約20kmの距離にある。河北省は全国一の梨の産地であり（『中国農業年鑑』2000：243）、常信二村のある趙県東部は、滹沱河跡の砂地であるため水はけが良く梨栽培に適し、趙県の主な梨栽培地区となっている。

常信二村は農業を主な生業とする集落で、村には村政府、小学校、数軒の商店、床屋、薬屋、診療所等があり、中学校は疙瘩頭郷の中学校に通う。常信村はもとは一つの自然村だったが、1958年人民公社設立により二つの大隊に分かれ、1984年の人民公社解体後は常信一村、常信二村となる。村人の間では現在でも一つの村という意識が強く、常信二村の敷地にある水祠娘娘廟の廟会も共同で行っているが、本稿は主に常信二村において行った調査に基づいている。以下で常信という場合、それは通常常信二村を指す。常信二村は人口2605人、660戸である（2000年

現在。趙県供電局発表)。

村の中心は村政府がある通りで、この通りに商店や床屋、薬屋なども並び、市場や廟会もここで開かれる。旧暦の二、七のつく日に開かれる市場には常信村及び周辺の村々から農業と兼業の行商人が集まり、農産物、食料品、雑貨、衣類などが主な商品である。

村の農業は梨栽培を中心に、りんご、小麦、トウモロコシ、粟、落花生、綿花、野菜、豆類などを栽培する。

常信二村では賈姓が約7割を占める。家譜の記載によれば、賈姓の先祖は明代に山西省洪洞県から来たとされ<sup>6)</sup>、賈姓は全部で22代になるという。常信の姓には、賈のほか、周、劉、安、段、田、武、閻、王など10数の姓がある。

また現在「家譜案」(宗廟や先祖の画像を一枚の布に描き、故人の名を書いて正月に祭る)をもつのは賈、周、劉、段、安の各姓である。以前、賈姓と周姓には家譜案を祭る「掛房」(宗廟)があったが、文化大革命の時になくなり、再建の話もない。賈、周以外の姓に「掛房」はなかったという。

現在賈姓では、一族の中で「輩」(世代)が上の長老格の老人が家譜、家譜案を管理している。旧暦十二月三十日に家の正房(敷地の北側にある家の中心的な建物)の部屋に家譜案を掛け、一月一日に同族の男性はその家にいって拝み、一月五日にこの一年で亡くなった者の名を書き、しまう。この地域では以前から家に先祖の位牌を置くことはなかったといい、他に先祖祭祀は年三回、一月一日、清明節、十月一日の墓参りのみである。

常信という村の名の由来は、東西に細長い村だったので、昔は「長村」「十里長村」と呼ばれていたが、娘娘廟が建てられてから人々が敬虔に信仰したので、「常信」と呼ばれるようになったという。

常信の水祠娘娘廟は水の女神である娘娘を祭り、毎年旧暦五月二十九日を中心とした数日間には娘娘廟会が举行される。村に伝わる縁起によれば、後漢の劉秀(後の光武帝)が敗走していた時、常信村で賈亜茹という娘に水と食べ物をもらい助けられるが、娘は男女が接してはならないという礼節を破ったと家の者に非難され、井戸に飛び込んで死ぬ。その後井戸の水は涸れることなく、光武帝は即位後、廟を建て祭ったという。

清光緒二十三年(1897年)刊行の『趙州志』には、常信の娘娘廟についての記載がある(『趙州志校注』1985:284)。

「州東常信村西四里許有一廟、故老相伝、漢光武北絢時至此飢渴、遇一老婦、提水一瓶、光武求飲之。又將水倒於地、人馬極飲極深、用之不竭、人疑為神泉。光武即位後勅建祠云、昭濟聖母廟。門内鑿一井、至今遇旱災、祈禱輒靈。見碑記。」

(趙州の東、常信村の西四里ほどのところに一つの廟がある。老人が相伝えるところによると、漢の光武帝が敗走していた時、ここに至り飢え渴き、一瓶の水を提げた老婦に遇い、光武は求めてこれを飲んだ。また水を地に倒し、人馬が飲めば飲むほど深く、これを用いて尽きることがなかったので、人は神泉ではないかと疑った。光武は即位後勅命し祠を建

て、「昭濟聖母廟」と名付けた。門内に一つの井戸が掘られ、今に至るまで、旱災に遇い、祈禱するとすぐに靈驗がある。碑記に見る。)

このように光武帝が敗走していた時、老婦に水をもらい助けられるが、その水は神泉となり、光武帝は即位後その老婦を祭り「昭濟聖母廟」を建てさせたとある。ここでは劉秀を助けたのは老婦とされ、娘娘についてはいくつかの異なる縁起が存在している。この縁起には、河南、河北に広く伝わる劉秀伝説との関係が窺え<sup>9)</sup>、こうした『趙州志』の記載からも、常信の娘娘廟が靈驗のある水の神として知られていたことが見て取れる。

村人によれば、昔の娘娘廟は大きく周囲百里以内の村々から娘娘廟に「求雨」(雨乞い)に来たという。昔の廟の水は「神水」で病氣治癒に効くとされていた。現在でも娘娘に「求雨」すればすぐに雨が降り、娘娘廟会期間中には毎年必ず雨が降るといわれる。また何事にも靈驗ある神とされる。しかし現在では、「求雨」儀礼は行われていない。

民国期の娘娘廟は大きく、毎年旧暦五月二十九日の廟会も1938年以前は4、5日間開かれ演劇も上演されていたが、その後規模も小さくなり、新中国成立以前に廟はなくなったという。改革開放政策開始後の1983年に村のもう一つの廟、姜爺廟が、1984年に娘娘廟が初めて再建された。しかしその後また壊され、現在の廟は1989年に再建されたものである。姜爺廟は治病や「発財」(財をもたらす)の神で旧暦十月十五日が廟会であるが、規模は娘娘廟会よりも小さい。

廟会の開催は、推薦で選ばれた3人の「会頭」を中心とした村の男性たちの会が担っている。また村には主に年配の女性達による念経会もあり、廟会の準備や廟会でこの地域に伝わる経を唱えることによって廟会における祭祀を担うこと、他村の廟会に出向き経を唱えることを主な活動とする。

## 二 家に祭られている神々

常信の家は中国華北の四合院様式を基本とし、中庭を囲んでいくつかの建物が配置され、南東あるいは南西に門を作り、敷地全体が高い塀で囲まれている。庭の北側に位置する「正房」が家の中心的な建物で、居間兼食堂、家の主人夫婦及び家族の寝室がある。東房あるいは西房は厨房、納屋及び家族の居室となり、その向い側に便所、豚を飼う猪圈、倉庫等をおき、南には建物は建てない。一つの家に住むのは夫婦と未成年の子供達で、子供の成人後には、両親は長男とは限らないが一組の息子夫婦と同居するというのが一般的である。

家に祭られる神には、正房に神案(神の画像)、財神、「盆草」、地母、厨房に灶神、納屋に倉官、庭の南壁に南海老母、「影壁」(門を入ったところに設置された壁)に土地神がある。また春節(正月)期間の間は正房の入口横の外壁に天地神が祭られる。この他門神赤い箸、などを祭る家もある。どの家でもこうした神を祭っているわけではなく家によっても祭る神は異なるが、神案、財神、地母、灶神、倉官、南海老母、土地神という組み合わせで祭る家が多い。昔はどの家にも家神があったが、現在は若い世帯にはないことが多いという。

趙県地方志編纂委員会により1983年に編纂開始、1993年に出版された『趙県志』(中国城市出

版社)の「民情習俗」の年越し行事の項には、以下の記述がある(『趙県志』1993:531)。

「趙県城郷居民、除極少数人家信奉基督教、天主教及伊斯蘭教外、大多数人家都供奉所謂“家宅六神”(天地、灶王、土地、南海大士、閼帝、財神)以及倉官、馬王、車神、路神等、都布置神位、上供焼香、全家团聚吃“年夜饭”。」

(趙県の街、村の住民は、ごく少数のキリスト教、イスラム教信者以外、大多数の人々はみな所謂「家宅六神」(天地、灶王、土地、南海大士、閼帝、財神)及び倉官、馬王、車神、路神等を祭り、神位を配置し、香を供え、一家団欒して「年夜饭」を食べる。)

ここからは、趙県において天地、灶王、土地、南海大士、閼帝、財神及び倉官、馬王、車神、路神といった神が、年越しの時、家に祭られるということがわかる。家神を祭ることは、県志にこうした記述が載ることからも地元では一般的な習慣であると考えられる。

では、以下で常信において家に祭られている神々の性格、由来などについて、地元の人からの聞き書き及び文献資料に基づき述べていきたい。

### 1. 神案(諸神画、観音老母、閼羽等)

帆布のような布に多くの神々を描いた神画である。人々は一般に「神案」(神を祭る案、神棚)と呼ぶ。図案には、数多くの神々が一面に描かれている諸神画や、中心に老母(観音、女神)もしくは閼羽が大きく描かれ、その周りに他の少数の神が描かれているもの、閼羽の単独のものなどがある。

神案は「正房」(家の中心となる北側の建物)の入口を入った正面に祭られており、家神の中でも中心的な位置を占めていると言える。その大きさは各家によって異なり、大きなものは横80cm縦150cmほどである。神画は数年に一度、古くなると絵師に頼んで元の図案の通りに描き換えてもらい、古い神画は燃やす。これを「新しい衣裳に着替える」といい、「神も新しい衣裳を好む」と考えられている。神画の図案は先祖から代々受け継がれてきたものであるとされるが、治病祈願などで宗教職能者の勧めにより新たな神を加えたり、新しい図案の神画を描いて祭ったりすることによって変化もしていく。

旧暦の毎月一日と十五日には線香を供え、信心深い人になると毎日朝晩、線香を供える。神案には主に家の「平安」や家族の健康が願われる。また治病、豊作、財、子授かり、子供の受験、旅の安全なども願うという。

永尾竜造『支那民俗誌』によると、民国期、北京地域の一般の家で祭られる神の中では「大佛」と呼ばれる神画が最も大切にされ、その図案には二種類あって、「一枚の掛軸に天地間の諸神像を出来るだけ多く絵いて集大成したやうなものもあり、また一枚の絵を三段に分ち、最上段には白衣の観世音菩薩が、浄水瓶を手にして座し、善才童子と龍女とを従へた図が画かれ、中段には三位の娘々神、其の下段に閼羽と其の一群の財神とが絵かれてゐる」(永尾1940b:20)という。こうした特徴は常信において見られる神案画とも基本的に共通しており、このような図案の神画が北京から河北にかけての地域で家に祭られていたことが窺える。

## 2. 財神

神案と同じように布に描かれている小さな神画である。財神画は神案の向かって左側に祭られているか、もしくは家の穀物等を貯蔵しておく部屋に祭られる。老夫婦姿の二神が描かれており、「財神爺爺、財神奶奶」（財神おじいさん、財神おばあさん）とも呼ばれる。

夫婦神の両脇には何人かの家臣が、下方には「聚宝盆」と書かれた盆に、白い袋から宝物を取り出している人物が描かれている。この人物の手が部屋の内側を向いていると財が貯まるといわれ、手が部屋の内側を向くように財神の神画を貼る。財神は財が得られるようにしてくれ、また農民が畑でよい収穫があるように守ってくれる神であるという。財神は家の中で、家人や家のお金、穀物を取り仕切っているのだとも言われる。

財神として一般的なのは閻帝であるが、常信においては神案に祭られる閻羽には財神としての性格はなく、財神（財神爺爺、財神奶奶）が専門に財神としての役割を担っている。

財神について注目すべきことは、一般に財神はとりわけ商人に篤く信仰されてきた神という性格が強いように捉えられがちであるが、常信のような農村においては、普通の意味での「財」とともに、農民にとっての財、すなわち農作物の豊作をもたらしてくれる農業に関わる神としても信仰を集めているということである。

## 3. 灶神（竈神）

小さな木版画に財神と同じように夫婦の神が描かれており、「灶王爺、灶王奶奶」（灶王おじいさん、灶王おばあさん）と呼ばれる。毎年旧暦十二月二十三日には、灶神が家人の善悪の行為を天帝に報告に行く日とされ、灶神に飴を供えて口封じをするという行事が行われる。灶神に飴を供えて拜んでから灶神の版画を燃やし、除夕（大晦日）にまた新しい版画を貼る。

版画には「上天言好事 回宮降吉祥」といった文句が書かれている。また一月から十二月、二十四節気書かれ暦の役割も果たしている。版画の下部には犬と鶏が描かれており、犬の頭を戸口の方に向けて「避邪」とする。一般に、灶神は「管家的」（家を管理する、司る）といい、家を司る神とされる。また他にも様々な靈験がある神と考えられている。

灶王爺は「管家的」（家を管理する、司る）である。また、食事を作る者が無駄遣いしないように見張っている。  
（陳A 69歳 女性）

灶王爺爺、灶王奶奶は台所に虫や蟻を寄せ付けないようにしてくれる。また粥などの食べ物が減らないようにしてくれる。  
（賈X 46歳 男性）

村の中でなにかあれば村長を訪ねるように、家の中でなにかあれば灶王爺のところに行って、灶王爺に言えばよい。子供がご飯を食べなかったり、家に病人がいる時などは灶王爺に線香をあげ、叩頭して祈ればすぐ良くなる。  
（孟A 68歳 女性）

このように、灶王爺は家人の行為を見張り、天に報告する役人的な神というだけでなく、台所に虫を寄せ付けないようにしたり、食べ物が減らないように守ってくれる台所の守り神でもある。また子供の守護神、家の中のこと全般を司り守ってくれる神といった役目もあり、幅広い

役割を担っている重要な神だと言える。こうした性格により、灶神は「一家之主」（一家の主）とも呼ばれることがあるのだと思われる。

常信では灶神を祭るのは主に主婦の役目となっている。しかし中国において、灶神の祭祀は古くは女性の行う祭であったとみられるが、宋、明清時代には男子が行うことが一般的であったとされる（中村1988：290）。中国の家に祭られる神の中で、最も一般的な神がこの神であり、地方志をみても全国的に灶神についての記録がみられる。

#### 4. 土地神

村の家の門を入ると、一般に正面に「影壁」と呼ばれる壁があり中が窺えないようになっているが、その壁に家の外に向けて祭られているのが土地神であり「土地」「土地爺」と呼ばれる。小版面があれば、陶器の小さな人形やタイルの絵などのこともある。土地神は白髭の老人姿で表され、門を見張って家を守っているのだとされる。

土地は「看門的」（門を見張る）である。「鬼」や良くないものが入ってこないように守っている。  
（孟A 68歳 女性）

このように、門から入ってこようとする「鬼」（亡くなった人）やその他超自然的な良くない存在に対する認識が人々の中に存在していることが窺える。家の門にはこの他、家によっては赤布を扉の取っ手に結び付けて「避邪」としたり、門神を祭ったりすることもあり、家の外と内をつなぐ門を守ることが、人々にとって重視されていることが見受けられる。

なお、中国では一般に門神が門を守る神とされているが、常信では祭っている家はごく少数である。これは、土地神が家の門を入った正面に祭られ、すでに門を守っているため、さらに門神を貼る必要がないからだと思われる。

ところで土地神には、一定区域を管轄する地域の神としての土地神、家宅を守護する土地神、家の祭壇の下に祭られる土地神、墓を守護する土地神、また住宅を建てる「謝土」儀礼の際に祭る土地神など、様々な種類の土地神があり（酒井1980：368）（田村2000：55）、常信における家の門の守り神としての土地神は、土地神の幅広い機能の中の一つに過ぎない。

地域神としての土地神は、古代の「社」の系列を引くものと考えられ、宋代以降神々の官僚組織の中で県城の城隍神の下に位置する神とされ、住民の保護・監視を役割とした。また土地神は各家庭の灶神の上にあり、灶神からの報告を受けるとされた（相田1994：75-78）。そして村に死者がでると土地神が報告を受け、土地神から城隍神に報告すると考えられていた。

しかし常信に以前あった、地域で死者が出た時に報告を受ける廟は土地廟ではなく五道廟と老母廟であった。また常信においては墓に后土神は祭られておらず、「謝土」儀礼も行われていない。土地神の性格については、地域差も大きいものと考えられる。

#### 5. 南海老母

南海大士ともいい、観音のことである。庭の南側の壁に北向きに祭られ、「供奉南海之神位」

と書かれた札、あるいは陶器の人形で表される。「災難、困難にあった人を救ってくれる」、「家の平安を守ってくれる」などと言われる。屋外のこの場所にいるのは、衆生を救うため、あるいは他の神との賭けに負けてしまったからだなどと言われる。

家の屋外に観音を祭ることについては、民国期の滝沢俊亮による中国東北地方吉林の報告にも見え、それによれば吉林では屋内祭神として灶君、聖宗仏、観音、仏、三聖仏、財神、胡三太爺などが祭られ、屋外祭神として天地、観音、仏、胡仙、太陽が祭られていたという（滝沢1940：257-263）。

## 6. 倉官

倉官は厨房あるいは納屋として使っている部屋の、穀物を貯蔵しておく大甕の側面に、赤い札に「供奉倉官之神位」と書いて貼られた赤い札である。常信では旧暦一月二十五日は開倉節で、開倉節を終えれば新しい穀物を使って饅頭を作ってよいという。倉官は、「穀物を司る」「穀物をすくっても、明日にはまた満杯になっているようにしてくれる」などと言われ、穀物を守る神とされる。

永尾竜造『支那民俗誌』は、「填倉節」として倉の神を祭る日について述べている。それによれば北京における填倉は明朝に盛んになり、清朝には官府の貯米倉庫である倉場にも倉神を祭るようになり、米穀商や農家を中心に広く行われたという。また倉神については諸説があり、漢の高祖に仕えた武将、韓信とされることが多いが、神農氏や義倉を開いて貧民を救済したという明代の李宝倉であるともいわれる（永尾1941b：622-624, 632-633）。

## 7. 地母

神案の前に置かれた方卓の下の香炉が、地母のしるしとされる。土地神が門を見張る神であるのに対し、地母は家を司る神だとされている。地母は「畑の農作物を守り、豊作になるようにしてくれる」、「道を歩く時に転んだりしないように守ってくれる」といい、農業神や通行安全を守る神とされる。

1993年出版の『趙県志』によれば、「農曆七月十五日為中元節，俗伝為“地母奶奶生日”，農民在這天燒地頭紙，并用黃紙穿在一些田間作物的莖稈上，祈求豐収」（旧暦七月十五日は中元節である、俗にこの日は地母奶奶の誕生日と伝えられ、農民はこの日畑で紙を焼き、黄紙を田の作物の茎にはさんで、豊作を願う）とある（『趙県志』1993：532）。けれども現在、常信においてこうした行事は行われていない。

## 8. 天地神

春節期間には天地のあらゆる神が下天しそれぞれの家に降臨すると考えられており、それら多くの神々を表した木版画である。旧暦十二月三十日、すなわち「除夕」（大晦日）に祭られ、一月十五日もしくは十六日に燃やされて、神々は再び「上天」したとされる。家の正房（庭の北



側にある家の中心的な建物)の外壁に南向きに貼られる。

版画の図案には、玉皇大帝と閻帝を主な神とするものと、釈迦、老君、聖人(孔子)、玉皇大帝、閻帝などの神々が描かれたものの二種類があり、どちらにも「天地三界十方真宰」と書かれている。天地神は、正月に人々が無駄使いをしないよう見回りに来るという天の役人的な存在として捉えられている。

天地神は、常信で祭られるのは正月期間のみであるが、河北省井陘県於家村のように、同じ河北省でも場所によっては天地神を一年中祭るところもある。

## 9. 盆草、花瓶

神案画の隣に貼られる、花々を入れた花瓶を描いた版画もしくは絵であり、単独で祭られていることもある。この地域では、「盆草」「花瓶」というのは女神であり、姿は直接描かれてはいないが絵の花の後ろに隠れているのだと考えられている。

「盆草」は家の平安を守ってくれる。昔、病気の人が「盆草」に祈って病気が良くなったので、祭るようになったのである。「盆草」は「娘娘」(女神)であるが、姿が蛇で醜いので恥ずかしくて姿を表さず、花の後ろに隠れている。(陳A 69歳 女性)

このように盆草、花瓶は、家の平安を守り、病気を治してくれる女神であるとされる。のどが痛かったり、お腹が痛い時などに治してくれるという。

また盆草、花瓶は「白仙師傅」とも呼ばれ、物語『白蛇伝』の主人公の白蛇であるとされる。性格が穏やかで気立ての良い女神なので、線香をあげ忘れていたりしたとしても大丈夫だと言われ、以前神を祭っていなかった家でも、家人の病気などをきっかけに、盆草を祭り始めることがある。

さて、花の絵を祭るということに関連して、靳之林『中国の生命の樹』(1998)は興味深い論を提示している。それによれば、中国においては古来より、著者が「生命の樹」と呼ぶ、生命を象徴する樹、植物や花のモチーフが様々な形で表現され、今日も民間において生命の樹、生命の花などへの崇拝が広くみられるという。中国北方でも民間剪紙や年画などの図案に、水盆・水瓶の生命の樹、生命の花崇拝を表したものが広くみられるとされる(靳1998:143)。

このことから考えれば、常信で祭られている盆草・花瓶も中国民間において広く存在する、生命の樹モチーフにより「生命繁栄」を願う表現の一つとみることができると思われる。ただ、盆草・花瓶が人々によって植物として捉えられるのではなく、女神であると解釈されているのは、この地域に特徴的なあり方であると言えよう。

それから盆草、花瓶が白蛇の姿をした女神とされることについてであるが、『白蛇伝』には白娘子が、許仙を救うために仙界の靈芝草を盗んで与えるという話がある。また『白蛇伝』で白蛇の夫となる許仙は薬屋であり、民話として伝承されてきた『白蛇伝』には医薬にかかわる話題が多いといい(山口1998:190)、こうしたことの影響もあるのではないかと思われる。

## 10. 三組の赤い箸

常信には、三組の赤い箸を正房に祭っている家が2、3軒ある。しかし祭っている人も、どのような意味があるのかわからないまま祭っているのだという。これらの箸は「箸仙」と呼ばれる。

常信の例と関係があるかどうかはわからないが、三谷編（1999）の、趙県の隣県、河北省欒城縣東西営出身の女性からの聞き書きによれば、彼女が小さい頃祖母は何かあると灶王爺に神意を尋ね、焼香した後、箸を持ちその動きで神意を知ったという（三谷編1999：276）。

また山西省平遥では、箸の中国語「筷子」の発音が「快」（早い）と同じであることから、「快発財的箸」（早くお金持ちになる箸）といった吉祥の意味を込め、赤い箸を挿した瓶、櫛、鏡、箸を結ぶ五色の糸、清代の銅銭、赤い紙などを屋根の風水楼に入れる習慣があるという（田村1999：68）。こうした意味が込められていることも考えられるが、現段階でははっきりしないため、今後の課題としたい。

## 11. 神案画に描かれた神々

常信の神案画の中に描かれている神々の特徴としては、無生母、観音、閻羽、老君、仏爺、聖人、弥勒、玉皇大帝、老母、娘娘、奶奶、真武、三官、孫悟空、李靖、二郎、六郎、三皇、馬王、竜牌、薬王・薬聖、「師傅」、「仙」などがある。

こうした神案に描かれる神には、第一に観音、閻羽、玉皇大帝、老君（老子）・仏・聖人（孔子）の三教祖など中国の民間信仰における主要な神々がいることである。これらの神々はまた、以前村にあった廟で祭られていた神や、現在、村の廟会の際に他の多くの神々と共に祭られる神々でもある。常信に以前あった廟には、現在再建された娘娘廟の他、老母廟、閻羽廟、真武廟、三官廟、五道廟、得明寺がある。

第二に、神案画の中では女神の占める割合が比較的高い。常信で最もよく見られる神案画は、「老母」と呼ばれる観音老母や送子老母の図案であり、諸神画の中にも、女神としての普賢・観音・文殊の三菩薩や、三皇姑、娘娘達など多くの女神が見られる。これは、これらの女神が子授けや治病など、家庭生活に必要な御利益をもつとされていることと、家の平安を守るとされる神案には家人を保護してくれる母性的な神が求められることによるのではないと思われる。

第三に、二番目に述べたこととも重なるが、薬王・薬聖、「師傅」、「仙」などは病氣治癒、送子老母は子授けというように、神案画の中には家庭生活において必要とされる機能をもつ神々が祭られている。

最後に、孫悟空、白蛇といった小説や演劇に登場する神が比較的多いことが挙げられる。これは演劇などでこうした神々が広く親しまれるようになったことにより、家の神案にも取り込まれ、祭られることになったのだと思われる。

ところで、神案の最上段にしばしば描かれる女神に無生母がある。無生母、あるいは無生老母とは、明清時代中国社会に広まり多くの民衆反乱を生んだ白蓮教系の民間宗教結社において

信仰された女神であり<sup>9)</sup>、人類の故郷である真空家郷という天上世界の最高神とされる（浅井1990：73）。常信の位置する河北は歴史的に様々な民間宗教が盛んであり、おそらくそうした影響によりこの地域に無生老母信仰が広まったものと思われる。しかし地元の人々は「無生母」という名以外はこの女神について知らず、趙県の民間宗教に関する史料もないため、現時点ではこれ以上のことを知ることはできない。

だが澤田瑞穂が述べるように（澤田1975：60）、無生老母信仰は民間において観音、西王母、泰山娘娘といった女神信仰と重なりあったものであり、一般の人々にとっては無生母もただ、一人の女神として祭られてきたのだと考えられる。中国民間における信仰については民間秘密宗教と民間信仰といった二分した見方ではなく、両者を一つの大きな広がりの中で捉え、民衆の信仰の全体像を明らかにしていく作業が求められていると言えよう。

この他、神案に描かれる神々の中で注目すべきなのが、「師傅」「仙」と呼ばれる病を治すとされる神々である。これらの神々は村の宗教職能者の神案や、家人の病氣治癒を祈願して新しく祭った神案などにはほぼ必ず描かれている。病を治す靈験のある神々であるが、祭り方をおろそかにすると、怒って良くないことを引き起こすこともあるという。「仙」のうち「走馬仙」「跑馬仙」と呼ばれる白馬に乗った女仙は、白馬に神々を乗せて送迎したり、白馬に乗って出かけ、善事を行うという。

以上にみてきたように、常信の家に祭られる神々は数多く、多様な性格を具えている。ところで注意すべきことは、常信の人々にとっては必ずしも神案の上段に描かれているほど地位が高い神だというようには考えられていないことである。「神にはそれぞれの仕事がある」「神と神の間の地位の高低や、大小を言うことはできない」といい、神々はそれぞれ自分の受け持つ仕事を持ち、異なる役割を果たしているとされる。

### 三 家神の祭祀

この章では常信において家の神がどのように祭られているのかを年中行事や、祭り方、宗教職能者との関わりなどに着目しながらみていきたい。家神を祭るのは主に家庭の主婦であり、男性はあまり関わらないという。各家庭がそれぞれ家神を祭るが、神案面の描き換えなどに際しては村の宗教職能者の関与もみられ、新たに祭るべき神を定めたり、「開光」儀礼を行ったりする場合がある。

#### 1. 家神の祭り

線香をあげ、拝むというのが家の神の主な祭り方である。日々の日常生活、年中行事の特に年末から年始にかけて、そして村の数軒の家が行っている家神を祭る「会」の時などには、必ず線香をあげて拝む。また果物や飴、菓子なども供えられる。

家神を祭る際には、蠟燭を点し、香に火を付けて奉げ持ってから香炉に立てて、手を合わせ祈る。線香の本数は一般に神案には3本、他の神には1本を供える。日々の祭祀ではこれだけ

であるが、春節や何か祈願があるなど正式に祈る場合は「叩頭」といい膝をつけ、頭を深く下げ、手を三度し、黄紙、元宝を燃やし神に奉げる。「叩頭」や線香、黄紙、元宝を奉げるといった作法は、基本的に廟会における仕方と同じである。

## 1) 日常生活における祭祀

家神を祭っている家では、主婦は一般に旧暦毎月一日と十五日には家の中の全ての神々に線香をあげ、手を合わせ拝む。信仰熱心な人になると、毎日朝晩2回神案に欠かさず線香をあげる。このような日常的な祭祀では「叩頭」はせず、軽く手を合わせるのみである。

神案前には横に長い卓が壁につけられ、それと接して前に正方形の卓が置かれている。その左右には中国式の大きな木の椅子が一脚ずつ置かれる。卓の上には陶器製の大きな香炉や蠟燭立てがあり、両側には瓶に挿した造花が飾られていることが多い。毎月一日、十五日に梨、りんご等の果物やビスケットなどを供え、古くなった供え物を交換する家もある。梨等の果物はこの地域の農家の主な生産物であり、供え物としてもしばしば見られる。

## 2) 年中行事

常信で家神を祭る行事は主に春節（旧暦の正月）の前後にかけて行われる。旧暦十二月二十三日は「祭灶」といい灶神を祭り、旧暦十二月三十日の「除夕」（大晦日）と一月一日には天地神及び全ての神を祭る。一月十五日、十六日には天地神が天に帰る日といい、天地を祭る。また一月二十五日は「開倉節」といい、倉官を祭る。

この他、常信では五月二十九日の娘娘廟会と十月十五日の姜爺廟会という村の廟会期間中、それに二月十九日の観音菩薩生誕日においては、家の神案や他の神にも線香を供え祭る。しかし五月五日の端午節等その他の行事の時には、特に家神を祭ることはないという。以下において、それぞれの日にどのように家神を祭るのか具体的に見ていきたい。

### 旧暦十二月二十三日（二十四日）

灶神を祭る。この日には灶神が天に上り、玉皇大帝に家の人々の善悪の行為を報告するとされ、甘く粘る飴を供えて灶神の口をふさぎ、都合の悪いことを報告されないようにするという由来は中国で広く伝えられているものであるが、常信でもやはりこの話が知られている。

昔は供え物に用いる「糖瓜」という麦芽糖で作る飴を手作りしたが、今は市場で買うという。飴を供え、「叩頭」して折ってから灶神の版画を燃やし、灶神が「上天」したとする。

灶神は天に一週間留まり、十二月三十日の大晦日には天地神、即ち天地の多くの神々を連れてまた地上に降りてくるとされる。灶神の版画には「上天言好事、回宮降吉祥」という文句が書かれ、灶神が玉皇大帝に良いことを言うてくれるように、吉祥をもたらしてくれるようにという願いが表されている。

常信においては十二月三十日に灶神を貼り、一月十五日もしくは十六日にまた燃やしてしま

う家もあるといい、この場合は灶神の画像があるのは正月期間だけで、他の時にはなくなる。これは正月だけ祭られる天地神と同じ祭り方で、その祭祀の影響だと思われるが、同じ村の中で二通りの祭り方があるのは注意すべき点である。

十二月三十日（大晦日）

この日の午後に、年末の市で買っておいだ天地神（天地のあらゆる神々）、土地神、灶神の小さな木版画をそれぞれの場所に新たに貼り、倉官、南海老母の赤い札も貼り替えられる。この時、一年間貼ってあった土地神、倉官、南海老母の古い画、札を燃やして「上天」させる。また家の戸、窓の周囲や壁、納屋、豚の囲いなど各所にも、正月を祝うめでたい対句を長い赤紙に書いた「春聯」が、トラクターやトラック等には「出入保平安」「日夜保平安」といった札が貼られ、春節を迎える雰囲気となる。

夜になると五碗のおかず、五つの饅頭、棗を飾った花巻や饅頭を並べて天地神に供え、また神案や他の神にも供え物をして、蠟燭を点し、香をあげて祭る。おかずの中身は粉条、豆腐、野菜などである。それから爆竹をする。行う時間は各家によって違い、暗くなったらすぐに始める家もあれば、夕飯を食べ終わってからする家もある。年越しの晩には線香の煙が一晩中途切れないように、「竜牌香」と呼ばれる特別に長く太く曲りくねった線香が用いられる。

一月一日

朝起きると餃子を作り、小碗に入れ、天地神、神案、灶神、土地神、南海老母等家中の神に供えて線香をあげ、家族で「叩頭」をして拝む。信仰熱心な人は娘娘廟へお参りする。この日の午前中、男性は先祖の墓参りに行く。また互いに行き来して新年の挨拶「拜年」をする。

一月十五日（十六日）

この日は天地神が天に帰っていく日とされ、天地神に香を供え祈りを捧げてからその版画を燃やし、「上天」させる。この行事を十六日に行う家もある。また家によっては灶神の画像もこの日に燃やし「上天」させる。

一月二十五日

開倉節である。前日の一月二十四日の夜に、庭に竈の灰を円を描くように撒いて囤（穀物を貯蔵する囲い）の形を作り、その中に麦、粟等の穀物を入れておく。そして二十五日の朝に線香を供えて拝み、爆竹をする。春節期間中に食べる饅頭等は年越し前にまとめて作っておき、春節中は作ってはいけなとされているが、この開倉節を終えればまた新しく饅頭を作ってかまわないという。

このようにこの地域においては、家神祭祀に関わる年中行事は主に春節期間に行われ、家の神を祭ることが、春節の主要な内容の一つとなっている。年の変わり目に際して神を送り、再び神を迎えて祭る行事には、新年の家の平安や福への願いが込められていると言えよう。

### 3) 家神の「会」

常信では村の数軒の家において、家の神案を祭る「会」が行われている。この「会」とは一年に一回、会期中の一、二日間ずっと線香の火を絶やさぬようにして、家族皆で神案を拝み、家族以外の村の人々もやって来て拝するというものである。この「会」は個々の家世帯を単位として行われ、結婚して独立した息子や婚出した娘もやって来て参加する。同じ姓であっても他の家との関係はない。「会」の時には財神、灶神、南海老母、倉官、地母といった家中の全ての神にも線香を供えて祭る。

ある周姓の家では毎年三月十六日に「会」を開く。この日に「会」を開くことになったのは、以前妻が病気になった時、病気を治してくれた村の宗教職能者の勧めによるという。

また、ある王姓の家では十月四日に「平安会」と呼ぶ「会」を開くが、これは代々伝えられてきたことで、昔、病気になった先祖のところに、ある「師傅」(先生。ここでは宗教職能者を指すと思われる)が来て、病気を治してくれ、その「師傅」がこれからは十月四日に「会」を下さいと言ったので、この日に「会」をすることになったのだという。

それからある賈姓の家では三月一日から十五日に三皇姑を祭る「会」が開かれる。この三皇姑を祭る「会」は、河北省石家荘地域に広く見られる三皇姑信仰に基づくものである。三月の石家荘蒼岩山三皇姑廟会の期間中には常信からも団体で参拝に出かけるが、村でも特定の家で「会」を開き、三皇姑を祭るのである。

「会」には村の「行好」の(信心深い)女性達による念経会がやって来て経を唱える。また子授かりを祈願する者もいれば、産まれた子を神に託しにやってくる親もいる。子供が病気がちだったり乳を飲まないような場合、その子を神に託すと丈夫に育つのだという。神に託された子供は紐に小銭を通したものをお守りとして首に掛け毎年拝みに来るが、無事12歳になると「還願」(願はどき)をして、紐に小銭を通したお守りを神に返す。他にも病気の人や何か願い事のある人などが来て祈る。

こうした「会」にみえるように、家神がその家の家族のみではなく村の人々にも広く開かれているということは、家神の性格を考える上で興味深い点である。家神の一番の役割はその家の平安を守ることにあると思われるが、それだけでなくまた、一軒の家という範囲を越えて霊験をもたらすことができると考えられているのである。

### 4) 廟会

村の廟会においては、普段家神として祭られているいくつかの神も他の多くの神々とともに廟会の時に「請神」され、祭られる。常信の水祠娘娘廟会では土地神、財神が祭られ、廟会期間中使用する炊事場にも灶神がある。

水祠娘娘廟会での土地神は廟会会場である「棚」の入口に祭られているところから、これは門を見張り、「鬼」などの良くないものを入れないようにするという土地神の役割を廟会においても果たしているのだと考えられる。

また炊事場の灶神も欠くことのできない神である。廟会期間中は、村の廟会の準備運営に携わる人々や他村からやってきた芸能団体、信心深い人々による念経会などに昼食が提供されるが、その昼食を食べる前には必ず皆で灶神への祈りを捧げてから食べることになっている。

## 2. 家神の祭祀における諸要素

### 1) 「開光」

「開光」は、仏教における仏像の開眼儀礼に相当するもので、廟に新しい神像を祭ったり、家に新しく神案を祭る際には一般に、必ず行なわなければならないとされる。「開光」のための経を唱えながら、手に持った線香もしくは針で、神の像の頭、眼、耳、鼻、口、肩、胸、足をなでていく。神画に多くの神が描かれている場合には、それぞれの神について同様に行う。線香を用いる場合は、一人の神につき一本の香を用いて開光する。だが「開光」をするのは神案の神に対してだけで、その他の灶神、土地神といった神には行わない。「開光」の経を唱えることのできる人は村でも数人で、村の宗教職能者や「行好的」（信心深い人）であり、開光をする時には、それらの人に頼む。「開光」は旧暦十二月三十日の大晦日に行うことが多いが、「看香」で吉日を選定して、その日に行うこともある。

しかし、近年では開光を特にしないまま、神画を祭っている家も少なくないという。そうした場合は前もって神画を描いてもらって準備しておき、十二月三十日に自分で神画を掛け、香を供えて祭り始める。このことから、家神を祭る際のやり方が次第に簡略化してきている傾向があるように思われる。

では以下に常信で「開光」を行う際に唱えられる経を紹介する。

#### 「開光」

開頭光	開了頭光	亮騰騰	頭を開光する	頭を開光すれば明るく輝く
開眼光	開了眼光	看明亮	眼を開光する	眼を開光すればはっきり見える
開耳光	聽八方		耳を開光すれば	八方が聞こえる
開鼻光	聞香亮		鼻を開光すれば	香をよくかぐことができる
開嘴光	開了嘴光	吃供香	口を開光する	口を開光すれば供香を食べられる
開肩膀	穿衣裳		肩を開いて	衣裳をまとう
開前心	開后心	開了前心	亮騰騰	胸と背中を開く 胸を開けば明るく輝く
開了脚	走八方		脚を開けば	八方に行ける

この経には神の頭、眼、耳、鼻といった具体的な体の各部位が読み込まれており、ここには神も人間と同じような身体を持ち、その各器官が働いてこそ人間の祈りを聞き、供物を受け、自由に活動することができるとする認識があるように思われる。

## 2) 神案の描き換え

前述のように、家の神案は代々伝えられてきたものとされ、数年に一度、神画が古くなってきたら元の図案の通りに描き換えられる。しかし家族が病気になった時や子供を授かりたいなど願い事がある時には、村の宗教職能者に頼んで「看香」をして神に尋ねてもらい、神の同意を得て新たな神を加えたり、新たな図案にするということも行われる。「絵を取り替える時に勝手に新しい神を加えることはできない。でも、神が自ら来ることを望むならかまわない」のだという。以下に神案の描き換えに関する事例をいくつか挙げる。

10年前、「看香」をしてもらって病気が治った。「看香」をした人は神へのお礼にこれから「行好」をしてあちこちの廟会へ行くようにと言ったが、まだ子供が小さくて家を空けられなかったの、家にあった盆草以外に新たに大きな神案を掛けて祭ることにした。以来体は健康である。  
(李B 53歳 女性)

以前は関爺だけを祭っていたが、病気になって「看香」の人に見てもらおうと神案を掛けるといいと言うので大案を祭ることにした。するとしばらくして病気は治った。しかしその後また病気になり、さらに大きな案を描いてもらった。それが今の神案で、以来ずっと健康である。でも高血圧で、方々の廟会にお参りすることはできないので、家で神にお仕えしている。娘娘廟会の時には、毎回三日間ずっと廟の中で手伝っている。

(劉D 68歳 女性)

父母の家では関爺を祭っていたが、我が家では以前はなんにも祭っていなかった。以前私が病気になって治ってから、家の者が盆草を祭るようになった。(賈X 45歳 男性)

以前は老母だけを祭っていたが、家に病人が出たので願掛けをして、病気が治ってから大案を祭るようになった。もう20年くらいになる。  
(劉F 70歳 男性)

これらの事例をみると、家族の病気等をきっかけとして村の宗教職能者の勧めを受け、新しく神画を描いてもらい祭るようになったという例が多い。

ここで注意しておきたいのは、神案の描き換えにあたっては、神案を新しく描き換えてから病気が治ったり、願いが成就するという場合と、病気治癒や願い事成就のお礼として描き換えるという二つの場合があることである。

近年においては、宗教職能者の勧めや祭る人の希望によって、神案の神画が次第に大きく立派になっていく傾向があるようである。

神画の描き換えをめぐるのは、村の宗教職能者の活動と家神信仰とが密接に関係していることを見て取ることができる。描き換えにあたって新たな神を祭る場合には、必ず神の同意が必要とされ、神との意思疎通には宗教職能者の媒介が不可欠となっているからである。神案画の描き換えで新たな神を招く場合に、必ず宗教職能者の関与が必要とされるのは、それだけ、新たな神を招くということがその家にとって大きな意味をもつことであり、正式な手続きを踏んで行ふ必要があると考えられていることを示しているように思われる。



#### 四 神々の世界

常信において、神々は一般に天の役人的な存在として考えられている。例えば、灶神は「上天報事」で、玉皇大帝にその家族の一年間の行いを報告する神であり、天地神は天地の全ての神が年越しの際に家の者が無駄使いをしたりしないかどうか、その行いを視察に来るのだとされ、どちらも天界の役人的な姿で捉えられている。また人々は灶神を村の中の村長に例えて、家のことを何でも司っているのだと説明したり、神々を役所や病院の比喩を用いて説明したりすることもある。

常信におけるこうした神々のイメージは、中国民間で広くみられる官僚としての神の姿と共通するように思われる。漢民族の民俗宗教に関するこれまでの研究によれば、漢民族は一般に神々を天界の万神殿にある官僚的存在として捉えているとされる（渡辺1991：27）。

常信においても、こうした官僚としての神々像が思い描かれていることでは同様である。しかし、整然とした位階・役職の秩序をなす万神殿は想定されず、漠然と官僚としての神々が想像されているに過ぎないように見受けられる。

それは、常信では「神にはそれぞれ仕事がある」「神と神との間の地位の高い低いや、神の大小を言うことはできない」といい、神々の間の上下関係については口にされないことや、神案の図案に見える配置も上段の神の方が地位が高いというわけではなく、特に神々の地位を表したのではないとされることから知ることができる。

神々に対しては例えば、「学校と同じで、自分がどのクラスで勉強していても、学校のどの先生も尊敬しなければならないように、どの神も全て尊敬しなければならない。」などと言われる。また神の祭祀においても、特定の神の生誕日や廟会であれば当然その神を重視するが、基本的には全ての神々に平等に供物を供え、喜んで頂くことが大切だとされている。

こうしたことから見ると、常信において神々の世界の秩序というのは、はっきりと想定されているわけではなく、それぞれの役割をもつ神々同士の関係として捉えられているのではないかと思われる。この点については次に述べる、神々の間で「転告」（伝言）をしてもらうことが可能であるという考え方や、何か祈願がある場合、どの神でも、自分の最も信じる神に願えばよいのだとする考え方にも窺えるように思われる。「転告」については、次のように言われる。

神々も人間と同じように、他の神に願い事を「転告」（伝言）してくれる。例えば家の神案に送子老母が描かれていなくても、神案に子供が欲しいと願えば、神案の神々が送子老母に伝えてくれる。これは、何かあれば役所の中にいる知り合いの人に頼めば、その人が他の人をお願いしてくれるのと同じことである。 （李P 72歳 女性）

このように、神には他の神への伝言を頼むことができるとされる。伝言してもらうことができるので、たとえ家の神案にその役割を果たす神が描かれていなくても、神案の神に願えば大丈夫なのだという。

また、何か願いがあれば、どの神でも自分の信じる神にただ願えばいいのだという考え方も聞かれる。

病気の時には、廟に行ってもいいし、家の神案に祈ってもどちらでもよい。自分が信じるところに行けばよい。これは例えば、ある人が病気になった場合、家で寝ていてもいいし、村の医師を訪ねてもいいし、县城や石家荘の医師のところに行ってもいいのと同じである。  
(田A 40歳 男性)

ここでは、特に伝言をしてもらわなくても、例えば家の神案に、直接様々な祈願をしてもかまわないということが言われる。またここで医者に行く時のことが例として説明されている点には、神を人間側の都合により選択するという人間本位の考え方が見て取れるように思われる。

しかし、神と神との間の伝言が全面的に可能であったり、どの神にも好きに祈願ができるならば、わざわざ神案の図案を描き換えて、例えば目の病気に御利益のある眼光娘娘を加えてもらったりする必要はないはずであるが、実際には治病などを祈願して神案の描き換えを行うことはしばしば行われる。こうしたことから、個々人によって、またその時々状況によっても、祈願の仕方や祈願を行う対象の神は様々であることがわかる。

ところで、こうした神への「転告」(伝言)に関して、古家信平によれば、台湾では神々が上帝、天帝といった高位に位置する神々と、低位の神々とに分類され、神々間の位階秩序がはっきりと定まっているために、人々は直接高位の神々と接することはできず、低位の神々を通さなくてはならないとされる(古家1999:49-50)。

これは、常信においては神々間の位階秩序がはっきりしておらず、「転告」(伝言)も、地位の高低ではなく、異なる役割や靈験をもつ神々の間に行われるものと考えられているのとは、対照的であると言える。台湾の例と比べてみると、常信においては神々の間に明確な位階秩序は想定されず、それぞれ様々な役割をもつ神々同士の関係として捉えられているように思われる。

また、個人個人の考え方や時々状況に即して、神々のもつ機能や、神々間の関係などは柔軟に解釈されており、そこに一つの厳密な規定が存在しているわけではないように見受けられる。

## 五 家神信仰をささえるもの

家神は、昔は「家々戸戸」どの家も祭っていたと言われるが、現在では高齢者のいる家の多くでは祭られていても、分家する若夫婦の家には一般に祭られていない。また「開光」をしない家も多いなど、祭り方が簡略化してきている傾向も見られる。

社会変化の激しい現代中国においては、家神がすでに祭られなくなった地域も少なくない。1940年代前半に行われた『中国農村慣行調査』対象地域の1990年代における再調査によると、河北、山東、北京近郊の5つの農村のうち、廟や家神の信仰が復活しているのは、河北省樂城県寺北柴村のみであるという(三谷2000:339)。ここでは、この地域で家神信仰が行われていることの背景には何があるのか考えてみたい。

まず第一に、この地域では社会的変化はあっても、昔からの習慣、信仰がある程度保たれてきたと考えられる。それは、以下のような人々の言葉からも窺える。

常信のある60代の女性は「文革の時は家の神像も掛けてはいけなかったことになったので、戸棚の中にしまっておいて取り出さなかった。」「改革開放政策になって、また「拝仏」を始めた」という。同じく常信の50代の男性も「廟会は基本的にはとぎれたことはない。文革中、会ができない時も、（廟のあった）西の方に向かって礼をして祈ったりしていた。」という。

常信では娘娘廟、得明寺などの廟は民国期に廃され、その他の廟も文化大革命期に全て壊された。だが、家神は文化大革命期以外の時期には祭られており、常信のある男性は、「改革開放政策が始まるとすぐに、今から20年ほど前に（神案の）画像を描いてもらった」という。村の廟も1983年には再建が始まり、1989年に現在の廟が再建されている。

このように常信では家神を祭ることや、村の神を祭ることが途絶えたのは、文化大革命期だけであり、それが終わると家神や村の神はすばやく復活した。人々の信仰心が断絶することなく続いていたことが、この地域で現在も家神や村の神が熱心に祭られている理由の一つであると思われる。

またこの地域の人々の、年中行事などを含めた生活様式が、もちろん変化は少なくないとはいえ、基本的に保持されているということも大きいと思われる。家の神に対する祭祀は主に春節期間において行われ、春節行事の一環として家神の画像や版画もまた祭られているのである。

第二に、現代中国における社会状況がある。建国後、中国では社会主義思想により伝統的な文化や習慣が「封建」、「迷信」などとして否定されてきた経緯があるが、改革開放政策以降、「伝統文化」の見直しも進められてきている。常信の娘娘廟の祭りにも、2002年度には初めてテレビ局の取材が訪れた。民間信仰が「伝統文化」という一定の条件の枠内ではいえ認められるようになってきたことが、この地域で神々が祭られている背景にあるように思われる。

また、改革開放政策により、農家は自由に農作物を販売することができるようになったが、同時にそれに伴う生活の変化にも直面することになった。この地域の農家は、特産品である梨の商品作物化によりある程度の生活向上は果たしたが、梨の価格下落による収入の伸び悩み、病気への心配、子供の進学など悩みはつきない。人々が願う家の「平安」、家族の健康、富、豊作などには、豊かさや幸福を願う現代の農民の心情が込められているように思われる。

第三に、常信において家神、特に神案が祭られているのには、それが自分の先祖や先代の残したものであるとして重んじられ、大切にされていることにもよるように思われる。人々は神を祭る理由について口を揃えて「代々伝えられてきたものだから」「親、祖先が残したものだから」「昔からこうしてきたから」という。

改革開放政策以降、華南では先祖を祭る宗廟を再建し、族譜を新しく編纂する動きが活発であるが<sup>99</sup>、常信では宗廟を以前持っていた姓もあったものの再建の話はなく、家譜、家譜案もいくつかの姓が再び作ったに過ぎない。

この地域においては、宗族よりもむしろ廟会などの信仰に関わる活動が、複数の姓からなる

「会頭」を中心とした会や、信心深い女性達による念経会などによって行なわれ、村人同士の団結、交流を深める契機にもなっている。また、家の神案の図案は代々伝えられてきたものとされ、買姓の家では「老母」と「関爺」を祭り、段姓は「花瓶」を祭るなど、各姓により祭るとされる図案が存在し、親族関係との関わりが意識されている。

家神も含めた神の祭祀は、この地域の人々にとって自分達の「歴史」や「過去」とのつながりを再確認させてくれるものとなっているように思われる。

第四には、人々の「行好」（信心深い行い）を重視する意識が関わっているように思われる。この地域では村の廟会の手伝いをする、他村の廟会をお参りすること、家神を祭ることといった信仰に関わる行為を「行好」といい、「行好」は年配者、特に女性達の間に広く行われている。

「行好」とは『中日大事典』（愛知大学編 1987）によれば①慈悲の行いをする。恵む。②寄付する、という意味であり、一般的には広い意味での善行を指す。

私は一生涯廟に参り続け、40数年間「行好」をしている。子供達は皆よい生活をし、よい孫娘、孫息子も授けてもらった。体は健康で、家は平安である。これらはみな、（神の）靈験である。  
（孟A 68歳 女性）

このように「行好」は、家の平安や、家族の健康、富、子孫の幸福などを願って行われ、「行好」によって平安や幸福を得ることができるとされる。

善行を積むことによりよい報いを受けることができるという考え方は、中国民間に流布していた善書類に広くみられる。また吉岡義豊によれば、『易経』の「積善の家に余慶あり、積不善の家に余殃あり」というのが中国人の社会生活の信条であり、「善行を積みかさねておれば思いがけない幸運にめぐまれるし、反対に悪行をかさねておれば、おもわぬ災難に苦しめられる、といういましめである。中国人は、この言葉を社会生活の信条として数千年来、信じてうたがわぬ。」「実に「修善」「勤善」は中国人の社会の上下各層を通じて普遍的な、かつ最も基本的な道德律である。」（吉岡1974：16-17）という。

こうした道德律に相当するのが、常信、范莊においては、「行好」をめぐる考え方であるように思われる。「行好」にみられるのも、良い事をすれば報われるという、自己利益的ではあるが、神への信心を含む善行というものを奨励する倫理観、価値観であり、それが人々の信仰心の背景にあると言ってよいように思われる。常信の水祠娘娘廟会では大きな「積徳造福」という横断幕が掲げられているが、これも徳を積むことにより福をつくりだそうという人々の積極的な意識を表していると言えよう。

この地域における信仰をささえるものの一つに、このような「行好」という価値観があり、家の神への信仰もまた、こうした「行好」により家族及び自己の平安や幸福を求める人々の思いと、強く結び付いているのではないかとと思われる。

## おわりに

以上、本稿では現代中国の河北省趙県常信二村における家神信仰について、祭られている神々の性格、祭祀などについて検討し、この地域における家神信仰の背景に関して考察を行ってきた。

常信においては家の中に神案、財神、灶神、土地神、南海老母、倉官、地母といった神々が各所に祭られている。家神に対する祭祀は、日常生活、年中行事、家神の「会」といった時に行われ、祭るのは主に家庭の主婦である。家神の「会」からは、この地域の神案の霊験は家の者だけに及ぶのではなく、広く外に開かれているということを見て取ることができる。

また家神の祭祀における開光や神画の描き換えに着目してみると、開光の儀式は近年簡略化の傾向にある。神案の図案は代々伝えられてきたものとされるが、宗教職能者の関与や祭る人自身の希望によって、少しずつ変化していくものでもある。新たな神を加える描き換えの際に村の宗教職能者の関与が不可欠とされるのは、神案の図案に新たな神を迎えることが、その家にとって大きな意味をもつものだからだと考えられる。

神に対する人々の見方では、神々はそれぞれの役割をもつとされる一方で、神々の間の伝言が想定されたり、どんな願いにも対応できるとされるなど、柔軟な捉え方がされている。

家神が祭られている背景には、信仰心の継続や年中行事などを含めた生活様式の保持、現代中国の社会状況、人々の歴史や過去とのつながりとしての意味、「行好」という価値観などがあるように思われる。

家神の研究に当っては、村の人々の信仰、生活全体の中で検討、分析を行う視点が不可欠であるが、本稿においてはこの地域の家神信仰を整理して捉えることに重点をおいたため、村の信仰や生活との関わりについては十分に考察を行うことはできなかった。これは今後の課題としたい。

それから中国における家の神については、現時点では現代中国における調査報告例がわずかなことでもあることもあり、まだ十分にその様相、性格等について分析、解明がされてきたとは言えない。民俗調査の進展とともに蓄積されていく他地域の資料も踏まえ、中国の家神信仰における趙県の事例の位置づけというものを明確にしていくことも、今後必要な作業であると言える。また歴史的背景に目を転じれば、中国においては皇帝のみが天を祭ることができるとされたように、祭祀を行うということが公的な意味をもち、歴代王朝によって各行政段階から村、各戸に至るまで祭祀に関する規定が定められていた<sup>40)</sup>。一方で民間には様々な民間宗教結社の影響なども存在しており、こうした諸要素との関わりの中で、民間の信仰は形成されてきた。このような点への考慮も、中国の家神信仰のあり方を考えていく上で重要であると思われる。

そして中国の家神信仰の研究においては、一地域における丁寧で全面的な調査研究を行っていくことが重要であるが、それとともに、日本の屋内神、屋敷神や、沖縄地域のヒヌカンなどの家の神、韓国の「家神」など近隣諸地域の家神に対する信仰との比較検討も含め、広い視野で捉えていくこともまた必要ではないかと思われる。例えば家の神と女性、宗教職能者の関

与といった問題についても、そこから新たに見えてくることもあるのではないと思われる。

## 註

- (1) 中国における近年の伝統的習慣の復活については、秀村研二（1993）、陶立璠（1996）、深尾葉子（1998）、中生勝美（1999）、郭於華主編（2000）などを参照。
- (2) 例えば、烏丙安（1995）は「家神崇拜」という項を設け、家神とは祖先神以外の「家宅保護神霊」を指すとする。
- (3) 竈神に関する研究としては永尾竜造（1940）、津田左右吉（1949）、吉岡義豊（1949）、池田末利（1981）、中村喬（1988）などがある。土地神については酒井忠夫（1980）、澤田瑞穂（1982）、財神に関しては永尾竜造（1940）、澤田瑞穂（1982）、窪徳忠（1986）などがある。
- (4) 例えば、『中国農村慣行調査』全六巻 岩波書店 1952～58、滝沢俊亮（1940）、永尾竜造『支那民俗誌』（1940-42）、直江広治（1967）、窪徳忠の台湾や東南アジア地域における一連の研究（1971, 1981, 1982, 1986）がある。また植松明石（1991）、渡辺欣雄（1991）、瀬川昌久（1991）も家神に言及している。
- (5) 華北において、先祖が山西省洪洞県から来たという移民伝説が広く存在していることはよく知られる。内田智雄（1970）などを参照。
- (6) 小松謙によれば、「劉秀逃亡の物語は、長期にわたって河南・河北一帯で非常によく知られていた伝説であり、この地の人々は何らかの記念すべき事物があれば、この伝説と結び付ける習慣をもっていた。」（小松1991：72）という。小松の清朝『職方典』記事の紹介によると、河北の伝説には一人の農夫が追われる劉秀をかくまって救った話や、劉秀が老婆から餅をもらい、後で見るとそれは石像だったという話、河南では劉秀が老婆から酒をもらった話などがある。また劉秀伝説には水に関わるものが非常に多く、井戸がひとりで傾いて劉秀の軍が水を得たという傾井の伝説や、劉秀の馬が地を蹴るとそこから水が湧き出したという馬泉の伝説が各地に伝わるという。（小松1991：70-72, 89）。
- (7) ここでいう宗教職能者とは、「看香」と呼ばれる香の燃え方の解説により神意を知ることができる」とされ、それによって治病を行う者を指す。こうした宗教職能者は村に数人おり、多くは年配の家庭の主婦であり、それを職業とするわけではない。「看香的」とも呼ばれる。「看香的」になるきっかけは病気などである。なお「看香」という技術そのものは、宗教職能者に限らず霊的な感覚が備わっていればできるとされ、廟会でも村の信心深い女性達の数人が行うため、ここでは治病を行う者を指して宗教職能者と呼んでおく。
- (8) 白蓮教系の民間宗教結社による民衆反乱に関しては、多くの研究がある。鈴木中正『中国史における革命と宗教』東京大学出版会 1974、青年中国研究者会編『中国民衆反乱の世界』汲古書院 1975、『続中国民衆反乱の世界』汲古書院 1983、谷川道雄・森正夫編『中国民衆叛乱史』3 平凡社 1982、鈴木中正編『千年王国的民衆運動の研究』東京大学出版会

1982, 浅井紀『明清時代民間宗教結社の研究』研文出版 1990など。

(9) 華南における宗廟などの復興については、王銘銘(1997)を参照。

(10) 中国における歴代王朝による祭祀制度の制定については、池田(1981), 小田(1994), 濱島(2001)などを参照。

#### 参考文献

- 浅井紀 『明清時代民間宗教結社の研究』研文出版 1990
- 浅川滋男 『住まいの民族建築学—江南漢族と華南少数民族の住居論』建築資料研究社 1996
- 池田末利 『中国における竈神の本質』『中国古代宗教史研究』東海大学出版会 1981
- 植松明石 『第四節 台湾の村と祭り—北部客家村の場合』『環中国海の民俗と文化2 神々の祭祀』凱風社 1991
- 内田智雄 『中国農村の家族と信仰』清水弘文堂 1970
- 小田則子 「清朝と民間宗教結社—嘉慶帝の「邪教説」を中心として—」『東方学』88 1994
- 金丸良子 『中国山東民俗誌』古今書院 1987
- 靳之林 『中国の生命の樹』言叢社 1998
- 窪徳忠 「台湾の土地神信仰」『宗教研究』207 1971
- 「中国の竈神信仰」『沖縄の習俗と信仰』1974
- 「東南アジア在住華人の竈神信仰」『歴史における民衆と文化』1982
- 『道教の神々』平河出版社 1986／講談社学術文庫版 1996
- 「東南アジア在住華人の土地神信仰」『東南アジア華人社会の宗教文化に関する調査研究』南斗書房 1987
- 酒井忠夫 「中国江南史上の道教信仰—特に土地神信仰をめぐる文化の地域性—」『仏教の歴史と文化』同朋社出版 1980
- 澤田瑞穂 『増補宝巻の研究』国書刊行会 1975
- 『中国の民間信仰』工作舎 1982
- 相田洋 『中国中世の民衆文化 呪術・規範・反乱』中国書店 1994
- 瀬川昌久 『中国人の村落と宗族—香港新界農村の社会人類学的研究』弘文堂1991
- 滝沢俊亮 『満州の街村信仰』満州事情案内所刊 1940
- 田村廣子 「平遥山西省の住まいと文化②住まいをまもる吉祥装置」『自然と文化』61 1999
- 「平遥山西省の住まいと文化③住まいと土地神」『自然と文化』62 2000
- 津田左右吉 「支那の民間信仰における竈神」『東洋学報』32-2 1949
- 敦崇／小野勝年訳注『燕京歳時記 北京年中行事記』平凡社 1967
- 直江広治 『中国の民俗学』岩崎美術社 1967
- 永尾竜造 『支那民俗誌』第一巻1940a／再版 東方文化書房 1971

第二卷1940b／再版 東方文化書房 1971

- 中生勝美 「多元磁力の中国農村」『エスキス』98 和光大学 1999
- 中村喬 『中国の年中行事』平凡社 1988
- 聶莉莉 「閩南農村における神々信仰—福建省晋江市農村での実地調査に基づいて—」『国立民族学博物館研究報告』22巻3号 1997
- 濱島敦俊 『総管信仰—近世江南農村社会と民間信仰』研文出版 2001
- 秀村研二 「現代中国農村における宗教復興」『明星大学研究紀要 日本文化学部・言語文化学科』第一号 1993
- 深尾葉子 「中国西北部黄土高原における廟会をめぐる社会交換と自律的凝集」『国立民族学博物館研究報告』23巻2号
- 福田アジオ編 『中国江南の民俗文化—日中農耕文化の比較—』国立歴史民俗博物館1992
- 『中国浙江の民俗文化—環東シナ海（東海）農耕文化の民俗学的研究—』1995
- 『中国浙南の民俗文化—環東シナ海（東海）農耕文化の民俗学的研究—』1999
- 『中国江南村落の民俗誌的研究—上海近郊村落の民俗—』神奈川大学 2001
- 古家信平 『台湾漢人社会における民間信仰の研究』東京堂出版 1999
- 三谷孝編 『中国農村変革と家族・村落・国家』第一巻・第二巻 汲古書院 1990 2000
- 三谷孝 「第七章 村の廟と民間結社」『村から中国を読む』三谷ほか編 青木書店 2000
- 三山陵 「中国山東省西南地区の正月風俗」『風俗』日本風俗学会 三六一二 1997
- 孟元老／入矢義高・梅原郁訳注『東京夢華録—宋代の都市と生活』東洋文庫 平凡社1996
- 山口建治 「民話と小説—白蛇伝の場合—」『中国通俗文芸への視座』神奈川大学中国語学科編 東方書店 1998
- 吉岡義豊 「中国民間の竈神信仰について」『宗教文化』1 1949
- 「現代中国の諸宗教—民衆宗教の系譜—」『アジア仏教史中国編』1974
- 渡辺欣雄 『漢民族の宗教—社会人類学的研究—』第一書房 1991

中国語文献

- 郭於華主編 『儀式与社会変遷』社会科学文献出版社 2000
- 陶立璠 「民俗意識的回歸—河北省趙県范莊村“竜牌会”儀式考察」『民俗研究』4 1996
- 陶冶 「走進“竜牌会”」『民俗研究』1 1999
- 『趙県志』趙県地方志編纂委員会 中国城市出版社 1993
- 李豊貴主編 『趙県投資指南』河北省趙県人民政府 河北日報图片社1999
- 李景漢 『定県社会概況調査』中華平民教育促进会 1933
- 劉其印 「范莊二月二“竜牌会”—竜崇拜の活化石」東亜民俗文化国際學術討論会発表論文
- 王銘銘 「社会人類学与中国研究」三聯書店 1997
- 烏丙安 『中国民間信仰』上海人民出版社 1995



- 張煥瑞 「中国竜文化園地的一支奇葩——趙県范庄“竜牌会”」河北省首届竜文化学术研讨会  
論文 2001
- 趙旭東 「郷土社会中的権威多元与糾紛——一個華北村落の法律人類学考察」北京大学博士論文 1998
- 『趙州志校注』趙県地方志編纂委員会 1985
- 『中国農業年鑑2000』国家統計局編 中国統計出版社 2000
- 周虹 「“竜牌会”初探」『民俗研究』4 1996

#### ＜付記＞

本稿は2003年1月に神奈川大学歴史民俗資料学研究科に提出した修士論文の一部を加筆修正したものである。論文執筆にあたって御指導下さった先生方、また大変お世話になった北京、石家荘、趙県の先生方、常信及び范荘の皆さんには、この場をお借りして心よりの感謝を申し上げます。

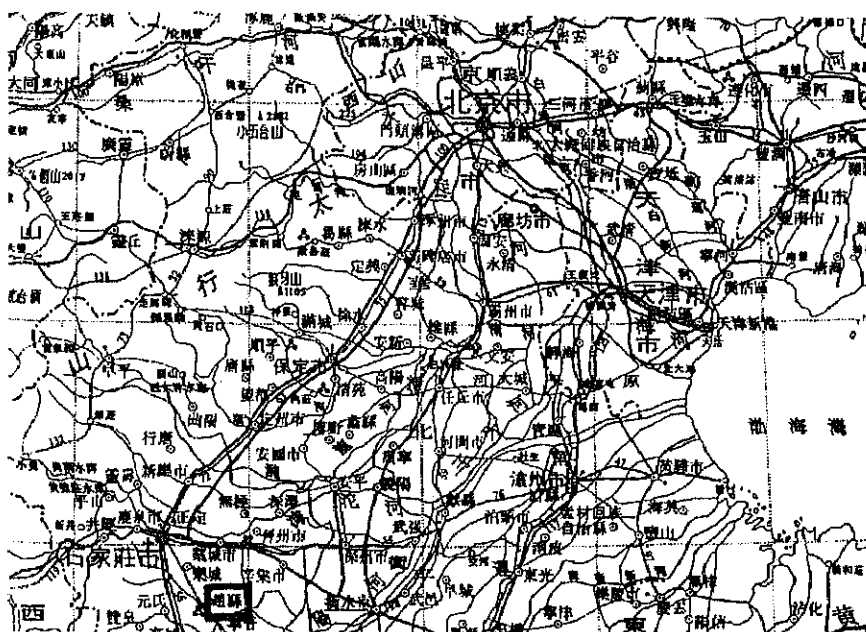


図1 河北省における趙県の位置

『中国地図新集』寰宇出版社 1998をもとに作成

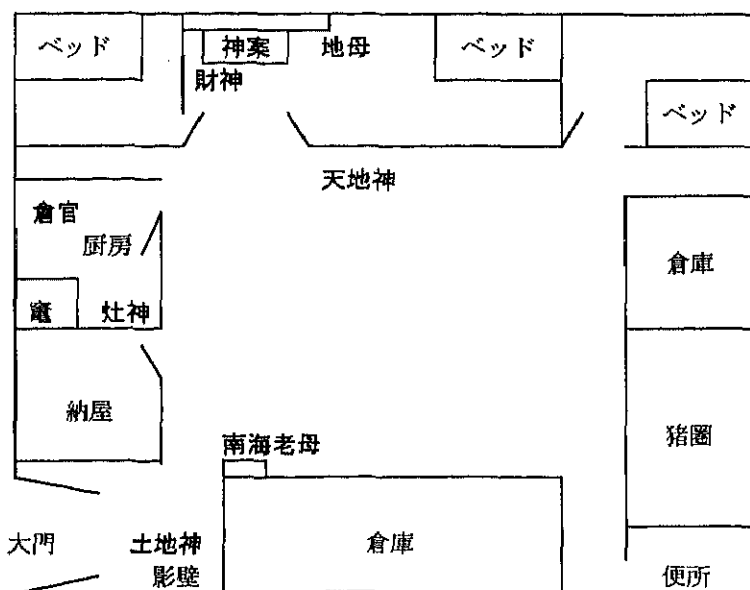


図2 常信の民家における家神の配置図

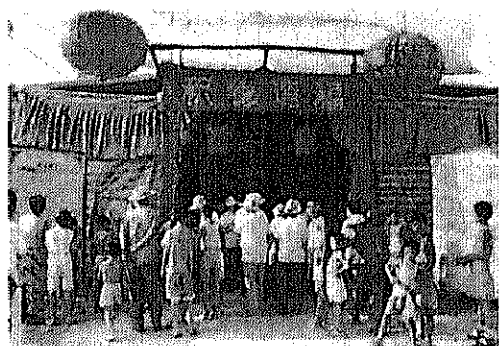


写真1 常信水祠娘娘廟会の会場



写真2 常信の村落風景

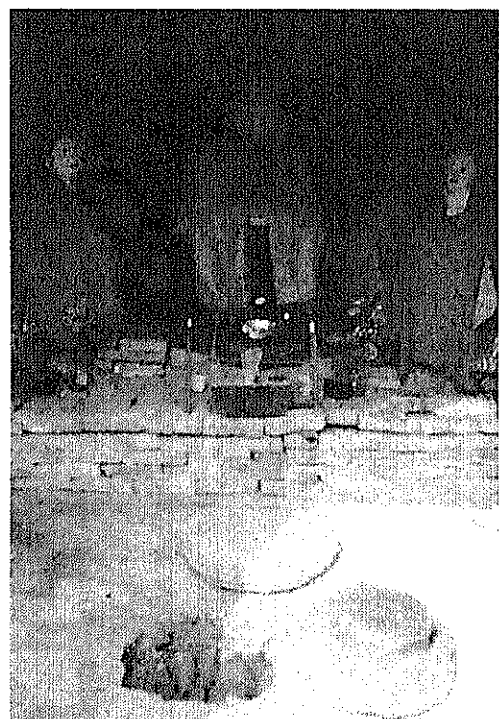


写真3 常信水祠娘娘廟会の娘娘像と  
縁起に基づく井戸



写真4 民家の中庭

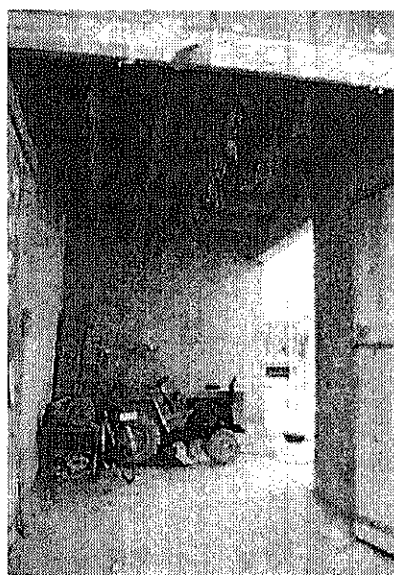


写真5 民家の門  
正面の壁に土地神の神意がみえる

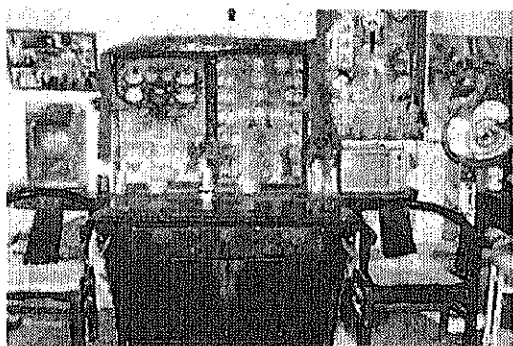


写真6 神案。右に諸神画、左に「花瓶」

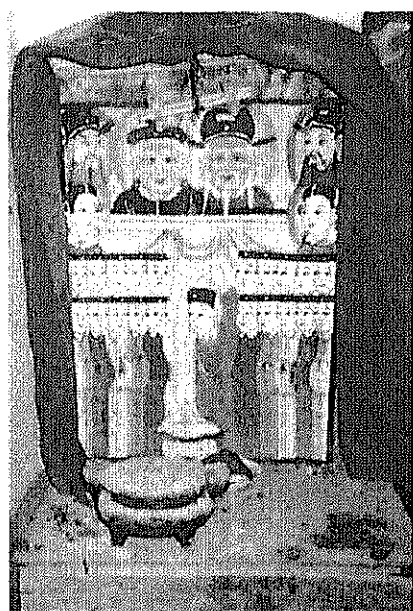


写真7 財神画

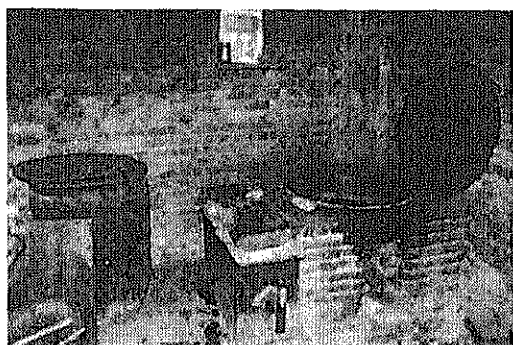


写真8 竈の上の壁に祭られている灶神

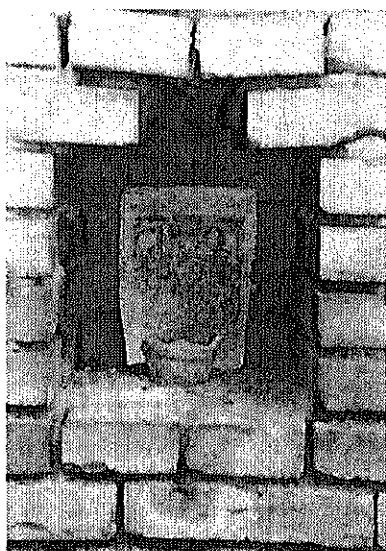


写真10 土地神

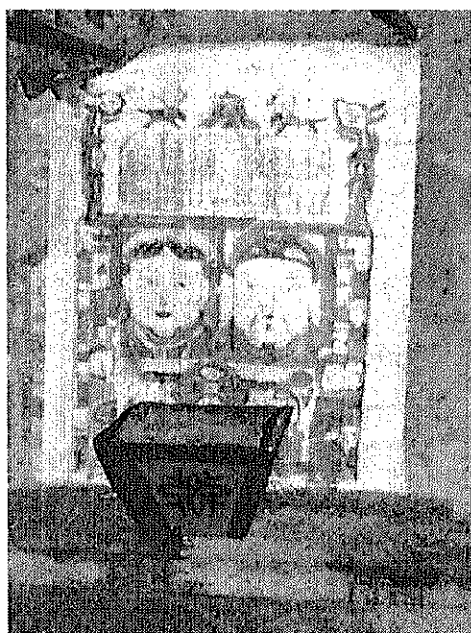


写真9 灶神

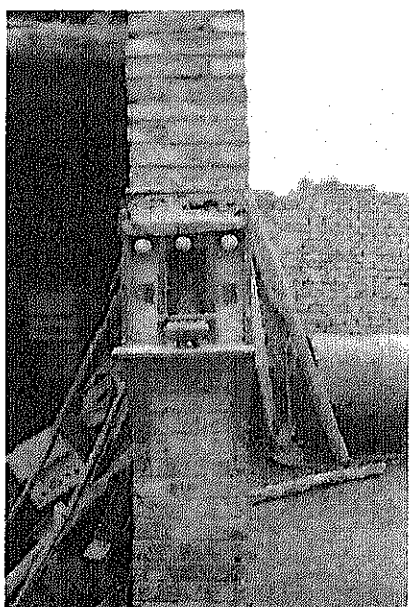


写真11 南海老母

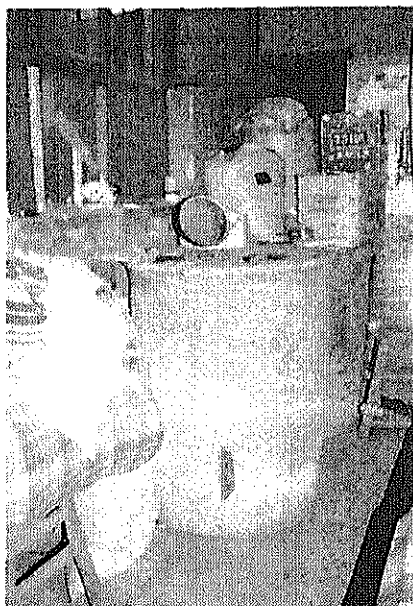


写真12 穀物貯蔵用の窠に貼られた  
「倉官之神位」の赤札

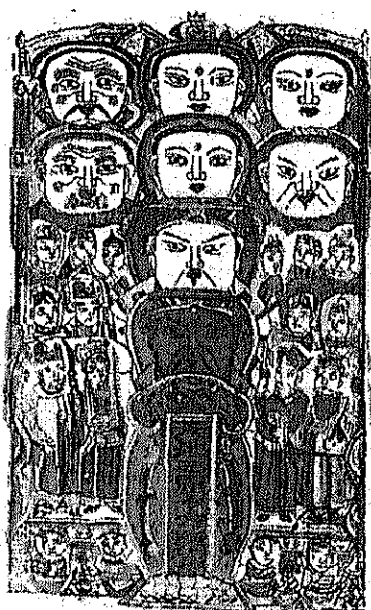


写真13 天地神の版画  
春節期間のみ祭られる

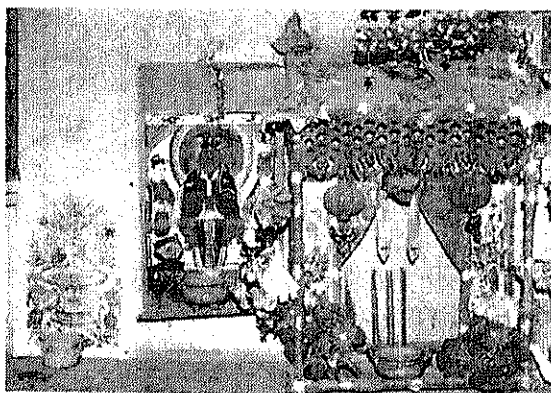


写真14 「盆草」「関羽」「赤い箸」



写真15 「老母」  
聖人・仏爺・老君／老母／関羽



写真16 「盆草」と「送子老母」

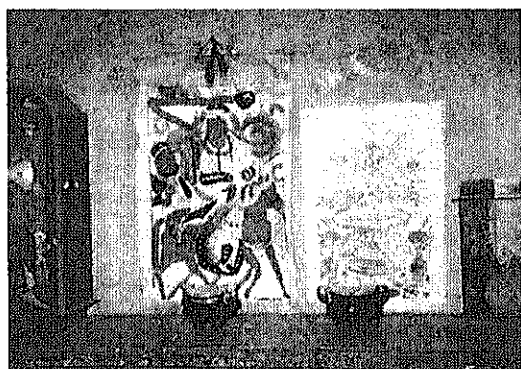


写真17 「関羽」と「盆草」

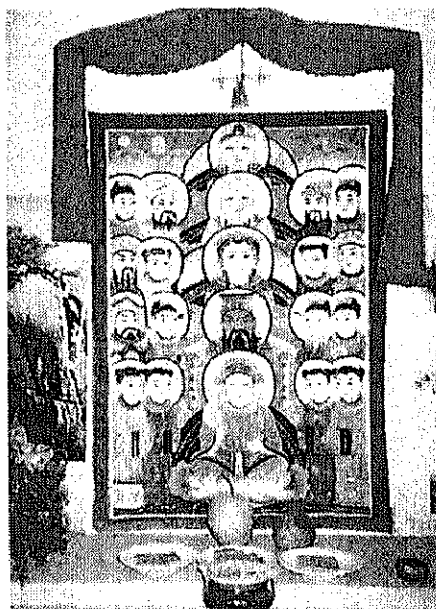


写真18 諸神画

無生母		
老君		
観音		
周倉	関羽	関平
	薬王	

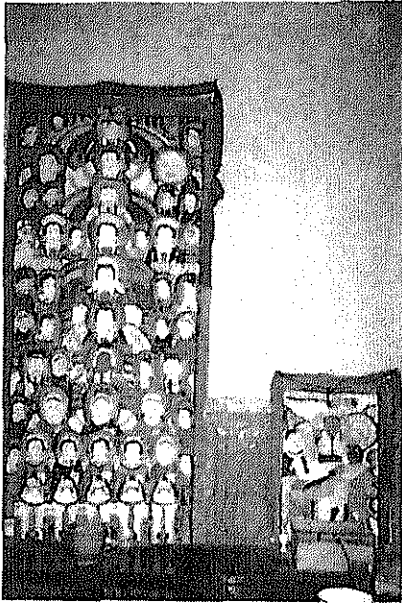


写真19 神案

左は家人の治病祈願により掛けた。  
右は代々祭ってきたという関羽。

無生母		
如来	如来	弥勒
馬王	玉皇大帝	真武
孫悟空	三皇姑	
	南海老母	
	送子老母	
藥王	関羽	藥聖
師傅	師傅	師傅
	五仙	

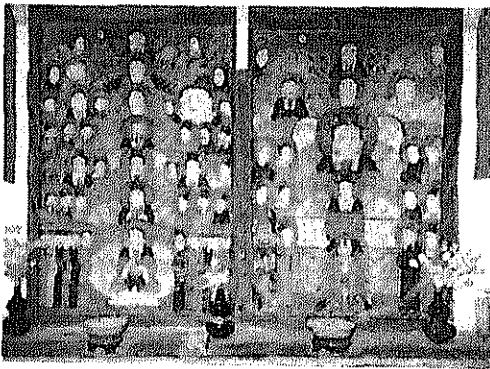


写真20 代々伝わるという図案

無生母			無生母		
	老君		聖人	仏爺	老君
仏爺	仏爺	弥勒			
	玉皇大帝			老母	
老母	老母	老母		送子老母	
	藥王				
蓮花老母			周倉	関羽	関平

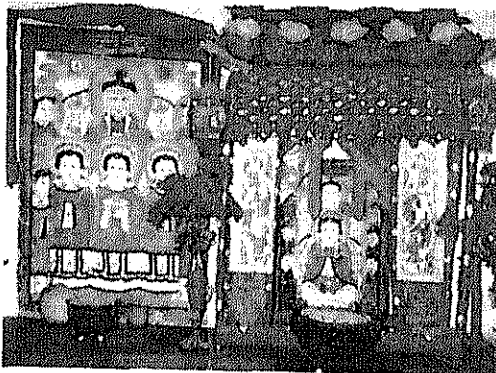


写真21 神案

左は奶奶と三仙。右は仏爺と老母で、紙楼に収められている。